

高血圧は最も頻度の高い疾患で、放置しておくとも脳卒中や心筋梗塞が起こり、時には致命的となります。米国で高血圧を「silent killer」沈黙の殺人者」と呼んで注意を喚起しているように、高血圧自体では、特別な自覚症状や身体的変化を引き起こしません。高血圧は血圧を測定する以外に発見する方法がないのです。検診や医療機関を受診することが大切です。高血圧の最も基本的な

検査は血圧測定です。繰り返し測定し、評価します。家庭での血圧測定や携帯型血圧計を用いた二十四時間血圧測定で得られた血圧情報も参考になります。高血圧の検査は、(一)脳、心、腎、眼底の合併症そして高血圧以外の心血管系疾患危険因子(糖尿病、高脂血症など)の発見と評価、(二)原因のはっきりしている高血圧(二次性高血圧)の発見、(三)降圧薬の副作用の発見などを目的に行いま

す。眼底検査は高血圧や動脈硬化の程度(重症度)を知る大切な検査です。尿をつくる腎と血圧との間には密接な関係があります。腎に障害があると血圧は上昇し、逆に高血圧が持続すると腎障害が発症します。尿検査では本来尿には含まれていない蛋白、糖、赤血球、円柱などの有無を調べます。血液を用いた検査では、ヘモグロビン、ヘマトクリット、全血球数、ナトリウム、

■高血圧症

血圧が高いと

いわれた時に受ける検査



日本臨床検査医学会
保嶋 実氏



カリウム、クロール、カルシウム、総コレステロール、HDL-コレステロール、中性脂肪、血糖、グリコヘモグロビン、尿素窒素、クレアチニン、尿酸、AST(GOT)、ALT(GPT)、AIP、LDHなどが初期検査の項目となります。二次性高血圧の発見のためには精密な腎機能検査とともに血漿レニン活性(濃度)、血漿アルドステロン、コルチゾール及びカテコラミン濃度の測定が必要となります。これ

らの測定値は食塩摂取量、薬剤などの影響を受けるので条件を一定にして検査を受ける必要があります。心電図検査で左室肥大や不整脈などを診断します。運動負荷心電図は労作性狭心症の診断に必須です。また、左室肥大による左室機能障害の評価は心臓超音波検査によって行います。

一方、胸部X線検査でも心胸郭比を測定し、左室肥大の有無を調べます。いずれにしても高血圧治

療の最終目標は、日常生活の質を損ねることなく生活習慣を是正し、降圧薬を用いて血圧をコントロールすることにより、脳卒中、心不全、心筋梗塞、腎機能障害(腎不全)などの臓器障害の発症を予防あるいはその進展を防止することにあります。したがって、血圧測定だけでなく、降圧薬の副作用の発見をモニターする項目を含めて定期的な検査を受けることが最も大切なことなのです。